Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-28

分娩後大量出血に対する選択的動脈塞栓術の有用性

山崎, 友雄 ; 森田, 宏紀 ; 白川, 得朗 ; 吉田, 奈央 ; 牧原, 夏子 ; 鈴木, 嘉穂 ; 天野, 真理子 ; 森本, 規之 ; 森実, 真由美 ; 出口, 雅士 ; 山崎, 峰·

(Citation)
日本周産期・新生児医学会雑誌,46(2):370-370

(Issue Date)
2010

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001402

PO-024 分娩後大量出血に対する選択的動脈塞栓術の有用性

Uterine Artery Embolization for Obstetrical Hemorrhage

神戸大学

山崎友維，森田宏紀，白川得朗，吉田奈央，牧原夏子，鈴木嘉穂，天野真理子，森本規之，森實真由美，出口雅士，山崎峰夫，山田秀人

分娩後の大量出血（postpartum hemorrhage：PPH）は弛緩出血，前置胎盤，癒着胎盤などを原因とする発症予測が困難な疾患である．PPHは依然として本邦における妊産婦死亡の主要な原因である．PPHの止血法として従来からの薬剤療法や外科的処置に加え，近年新しい治療オプションとして選択的動脈塞栓術（Uterine Artery Embolization：UAE）が行われるようになってきた．今回，我々は過去7年間で当院においてPPHに対するUAEを施行した56例について後方視的に検討した．出血原因の内訳は，弛緩出血15例，胎盤ポリープ14例，産道裂傷10例，常位胎盤早期剥離・DIC 5例，前置・低置胎盤3例およびその他9例であった．以前まではUAE施行全例でPPHに対する止血が可能であったが，最近，癒着胎盤で産後の持続的出血がUAEで止血不可能のために子宮全摘に至った1例を経験した．また，UAEによる止血は良好であったが，子宮筋腫合併の1例で塞栓術後に重症感染症を発症し子宮摘出を余儀なくされた．15例で同種血輸血を回避できた．胎盤ポリープ症例はUAE単独ないし経頸管ポリープ切除術併施により全例で子宮を温存できた．UAE後に挙児希望のあった3例全例でその後妊娠が成立し健児を得たが，1例は癒着胎盤であった．近年当院では，PPHリスクが高い帝王切開では術前に内腸骨動脈にバルーンカテーテルを留置することによって，術後PPHに対する手術室での迅速処置を可能とした．バルーンカテーテル留置を行った12症例中3例において術中バルーン拡張が必要と判断し実施した．2例はバルーン拡張のみで止血可能であったが，1例はさらにUAEを必要とした．UAEは止血成功率が高く，合併症が少なかった．したがって，本邦における妊産婦死亡の主因となっているPPHに対して臨床的に極めて有用であると考えられる．